

特別企画

## [SP5]特別企画5

## 医療を支えるデザインと映像 “昭和、平成と駆け抜けた各界のレジェンドたちが体験を通して次世代へ伝える”

座長:今中 秀光(宝塚市立病院 I C U), 重光 秀信(東京医科歯科大学学生体集中管理学)

2019年3月2日(土) 15:50 ~ 17:20 第1会場 (国立京都国際会館1F メインホール)

《医療を支えるデザインと映像》

“昭和、平成と駆け抜けた

各界のレジェンドたちが体験を通して次世代へ伝える “

## ●病室にアミューズメント？ 快適環境プロジェクト

【 EMC Effective Medical Creation 奈良医大の試み 】

井上聡己(奈良県立医科大学集中治療部 病院教授)

## ●医療現場における笑顔を作る薬剤？

【 色彩とデザインの力 】

武澤恵理子(一般社団法人総合デザイナー協会理事、同医療委員会委員長 )

## ●医師から映画監督の世界へ

【 映画ヒポクラテスたち 】は今？

大森一樹(京都府立医科大学卒業、映画監督、大阪芸術大学映像学科学科長)

## ●ファッションからライフスタイル、アートまで

【 変幻自在のデザイン思考 】

コシノヒロコ(ファッションデザイナー、神戸ファッション美術館名誉館長)

この度の学会のテーマは【次世代のために】

昭和、平成と続いた時代が幕を閉じるにふさわしいシンポジウムとなる様に50代60代70代80代の経験を重ねた感性豊かなメンバーからのメッセージをお届けいたします【デザインと映像で医療をささえる？】『Effective Medical Creation? E.M.C.?』『病室にアミューズメント?』『医療と映像?』『医療と色彩?デザイン?』

意味わからん！とお思いの方々 医療の世界を専門的な視点からだけではなく、ハートフルな視点でお考えいただけたらと思います。

まずは映像の世界ではテクニカルな3Dを駆使した画像展開も医療現場においては多々登場してまいりましたが、医療の世界を題材にした映像 特に[映画]の世界では その世界観の中に 人々の心の展開を様々な形で表現し問題を投げかけています。 時には納得し、考えさせられ、希望を見つけ 助けられ 時には怒りが込み上げてくる事も誰しもが経験ある事ではないでしょうか。 それは薬剤投与や医療処置と同じ役目を担い効果をもたらしています。[映画]によるユニークな視点から医療現場における 学問、技術、教育、そして人間力をどのように高めていくかをも探索していきたいと思います。

一方では、同じ医療現場において、色彩とデザインをベースとしたE.M.C. Effective Medical Creationの存在をお伝え致します。

Science (エビデンスや生理学) とArt (医療倫理や環境デザインの最適化など) が患者のケアに極めて密接に関

わっていることを長年にわたり経験した医師と同じ経験を持つデザイナーとの米国での共同研究によってE.M.C Effective Medical Creation は確立されました。

あらゆる角度から最大限に、そして効果的にマネジメントするチーム医療や、多職種回診、ユニフォームデザイン、視認デザインなどから始まり、【五感(視覚, 聴覚, 触覚, 味覚, 嗅覚)と想感(知恵と思いやり)】、を連動し現場に働きかけることにより、患者・家族・医療従事者の気付きと経験を構築したICUの快適空間作り,E.M.C、Art of Medicineを検証していきます。 Creative and Critical Thinkingの実験空間として病室を非日常的なアミューズメント感覚に変貌させ検証していきました。 生命維持装置等の高度な診療機器や薬物的介入などの治療だけではなく、音,光、香、衣、笑、安、眠、季、色、心、などICU環境に関わるあらゆる要素を取り入れながら、【五感と想感】を最大限に用いた患者ケアを現場に還元させました。さらに Art of Medicineの一貫として患者ケアの鍵となるコミュニケーション能力の改善や多職種連携やスタッフ達のストレス解消そして個々の能力を最大限に発揮できる環境作りを、次世代の為に 大森一樹監督、コシノヒロコデザイナー、井上聡己教授、武澤恵理子 E.M.C.プロデューサーと共に考えたいと思います。

## [SP5-1]病室にアミューズメント？快適環境プロジェクト

### 【EMC Effective Medical Creation 奈良医大の試み】

井上 聡己 (奈良県立医科大学集中治療部病院教授)

【オンデマンド配信】

昭和43年10月13日生まれ 京都出身

(誕生日の10月13日は日本麻酔科学会が制定する麻酔の日です)

昭和62年3月私立花園高等学校卒業

平成5年3月奈良県立医科大学卒業

平成5年4月奈良県立医科大学麻酔科学教室入局

平成7年8月財団法人大阪脳神経外科病院麻酔科医員

平成8年4月国立循環器病センター麻酔科レジデント

平成9年7月奈良県立医科大学麻酔科学教室助手

平成13年7月カルフォルニア大学サンディエゴ校麻酔科リサーチフェロー

平成15年7月奈良県立医科大学麻酔科学教室助手

平成16年4月奈良県立医科大学集中治療部学内講師

平成17年4月奈良県立医科大学麻酔科学教室講師

平成25年1月奈良県立医科大学集中治療部准教授

平成28年4月奈良県立医科大学集中治療部病院教授現在に至る

京都の右京区で高校まで過ごしその後大学進学のため奈良県橿原市移り現在は桜井市に在住。地方公立大学病院の慢性的な人員不足の中細々と麻酔カラーの集中治療に従事している。マンパワーに頼らない何かで効率よく業務出来ないかと模索しているうちにEMCと出会う。EMCに奈良医大らしさを加味することで業務の効率化による患者予後への効果を検討している。

EMCとはICUにおいて最大限に効率よく、かつ効果的にマネジメントするチーム医療を実現するため、五感

(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)と相感を連動して働きかけることで、患者・家族・医療従事者の誰もが快適と思えるICUの空間づくり、Art of Medicineをテーマとするものである。既存の医療現場のイメージにとらわれない環境を提供し五感に働きかけることをかけ、2016年から奈良医大集中治療部でも開始した。五感には快不快があり、生命原理的には快には接近、不快には回避・逃避行動をとる。本能的に不快には生命を脅かすものがあるため回避・逃避行動をとると考えられる。ICUに目を向けると不快な環境や刺激に晒される場合が多い。多くの患者はベッドにつながれているため回避・逃避は不可能である。快不快の原理から考え生存確率を下げる状況から逃れられない状態にあると考えられる。回避できない不快を相殺するには生存確率を上げる快を与えることがオプションとして考えられる。ここにEMCの五感に働きかける介入を効果的に利用できないかと検討している。しかしながら五感の快不快に関しては個人差が大きいので注意が必要であると考えている。また、この五感に働きかけるEMCはICUで働いているスタッフにも影響があると考えられる。快適な環境で働くことによりスタッフ間のコミュニケーションは改善されより良いチーム医療が提供できる可能性がある。この全体的なEMCを実践するためには、既存の病院の概念を超えたデザインやアートの力が必要である。現在奈良医大でも未完成ながらEMCの概念を取り入れ病室を改装し患者管理、職場環境改善に取り組んでいる。今回のシンポジウムでは、五感の一般的な解説と現在奈良医大で行われているEMC、また、EMCによる患者への影響を提示しEMCの紹介を行いたいと考えている。